

経済開発と「民族」の役割の再発見

——「陳埭回族」の事例を通じて——

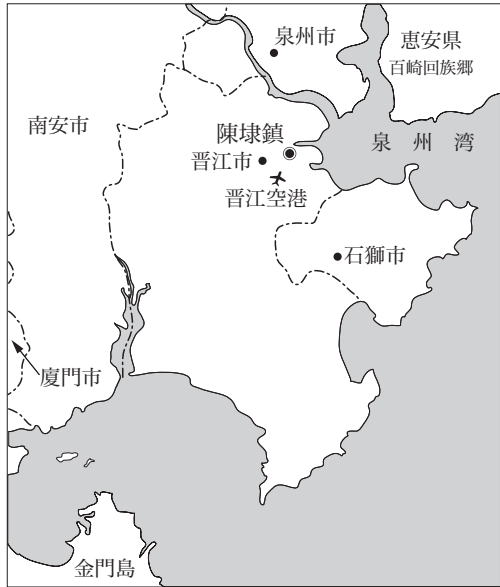
王 柯

はじめに

中国の少数民族のなかに、人為的に組み合わされたものがあつたことは周知の事実である。しかし同時に、その人為的に作り上げられたシンボルを甘受する人々がいることも事実である。こうした事実に鑑み、現実的に「少数民族」というシンボルがどのような、そしてどのように人々の生活に影響を与えているかについての研究は、今日の多民族国家中国を理解する上で実に不可欠であると思う。本稿は、こうした問題意識に基づき、一九七八年以降中国の経済開発につれて、福建省泉州市が所轄する晋江市陳埭鎮の回族住民によって「少数民族」というシンボルをめぐつ

て行われた様々な経済的社会的活動の内容、理由と本質を検証し、今日の多民族国家における「民族」というシンボルが果たしている新たな役割を分析する。

晋江市は中国で著名な「僑郷」（華僑の故郷）であり、全市の陸地面積は六四九平方キロメートルあり、海岸線は一・二キロメートルである。市街地を除き、晋江市は一三の鎮（二九三の村）を管轄し、戸籍上の住民数は一〇四万四五〇〇人であり、そのほか常に一〇〇万人以上の外来人口がある。晋江は本来「県」であつたが、農業人口の減少と都市人口の増加につれて一九九二年に「県級」の「市」に「昇格」し、二〇〇一年に福建省政府から「中等都市」との認定を受けた。全国の県および「県級市」のなかでも、晋江は強い経済力を持つことで知られ、二〇〇九年ま



福建省晋江市陳埭鎮の位置

でに一六年連続して「福建省十強県」（経済力のある県トップ10）のナンバーワンであり、「中国全国経済基本競争力百強県」の一員として二〇〇八年に第六位、二〇〇九年に第七位の評価を受けている。

晋江市は、現在一三の「鎮」から構成されている。一三鎮のうち、現在一番の経済力を持っているのが陳埭鎮である。陳埭鎮は泉州湾に面する晋江東部平原に位置し、二五の行政村と一農場によって構成され、面積は三八・八一平方キロメートルあり、海岸線は六キロメートル、戸籍上の

住民数は七万三〇〇〇人であるが、ここに出稼ぎに來ている人口は常時二〇万人以上とされる。経済力から言えば、陳埭鎮は福建省だけではなく、中国全国においても有名であり、二〇〇六年までに数年連続して福建省の「五〇強鄉鎮」（鄉鎮トップ50）のナンバーワンであり、二〇〇五年に中国の「鎮域經濟社會綜合發展指數」に基づいて選ばれた全国の「一千強鄉鎮」（鄉鎮トップ1000）のなかで第五四位の評価を受けた。

しかし注目すべきは、陳埭鎮の經濟發展に対して最も貢献しているのは、陳埭全人口の四分の三を占める漢民族住民ではなく、全人口の約四分の一でしかない回族の人々である。鎮政府による例年の經濟統計から、一九九〇年代以來、陳埭の回族住民による工・農業總生産はいつも鎮全体の約半分を占めていることがわかり、平均年収や享受している社會福祉の面でも回族住民の方がより充実している。陳埭は天然資源が全くない地域である。この少数民族住民が漢民族住民よりも豊かになった理由は、いうまでもなく、一九七八年以降の中国全体の經濟開發政策に対してむしろ少数民族住民の方が上手に順応したことにありと考えられる。しかし、国の經濟開發政策への順応は、「少数民族」というカテゴリーとの間にいったい何の關係があらうのか。そして、たとえあるとしても、なぜ他の地域、他の少数民族にとってはその効果が陳埭ほど目立たないの

か。いままで、中国のごく一部の研究者は、中国沿海地域に居住するイスラム教徒という特殊な集団である陳埭の回族社会に関して、その社会変遷や文化変容の側面からある程度の関心を示してきた。しかし残念ながら、「陳埭回族」が主体として行った経済開発活動についての研究、とくに「民族」という視点からその内容と特徴を分析するものは全く見当たらなかった。そのためでもあるが、本文は基本的にフィールドワークで入手した一次資料に依拠する。

一 比較から見た「陳埭回族」の経済力

陳埭という名称は、事実上行政単位としての「陳埭鎮」と地域概念としての「陳埭」（主に岸兜、鵬頭、江頭、溪辺、西坂、四境、花庁口の七つの村）というふうな現地の人々によって使い分けられていた。地域概念としての「陳埭」は、行政区画上において一九四九年一〇月から五二年までに晋江県第五区（区政府駐在地は現在晋江市政府の駐在地になった「青陽村」）に属していたが、五二年七月から第七区、一九五五年九月に涵坂区（二つの区政府駐在地はいずれも涵口村）、一九五六年六月に池店区、一九五八年三月に蘇厝郷（池店区と蘇厝郷政府駐在地はみな池店村）へと変更させられ、そして一九五八年からの人民公社

運動のなか蘇厝人民公社（公社本部駐在地は新店村）へと編入させられた。池店と新店がその地名からかつての商業集散地だったことがわかるが、「蘇厝」には大きな宗族勢力があった。涵口と蘇厝が現在なお陳埭鎮の一つの村であることから、一九五〇年代までに「陳埭」は政治的にも経済的にも地域社会の中心ではなかったことがわかる。

しかし一九六一年に「陳埭人民公社」が設置され、公社の本部が地理的な「陳埭」の中心である四境村に置かれた。一九八四年に「陳埭人民公社」は経済の発展と「離農人口」の増加によって「陳埭鎮」へと「昇格」させられたが、鎮政府の駐在地は四境村のままだった。かつて行政区画が頻繁に変えられていたにもかかわらず、「陳埭」が五〇年間にわたって「陳埭鎮」の中心的な地理位置をずっと占めることができた理由は、その地域全体における経済的な重要性がますます増えてきたことにあると考えられる。

陳埭鎮は現在二五の行政村（行政村が人民公社時代の「生産大隊」に相当する）を所轄している。注目すべきは、そのなかの「陳埭」、つまり岸兜、鵬頭、江頭、溪辺、西坂、四境（前社、後社、下溝、後坂の四つの自然村から構成）、花庁口（花庁口、湖尾、溝尾、村下頭の四つの自然村から構成）など七つの行政村（二三の自然村）から構成されている地理的「陳埭」の住民がほとんど「回族」であることである。陳埭の全人口は、人民公社の時代

に最大六万人前後だったと言われているが、一九八二年の統計によれば、当時「陳埭」の七つの生産大隊（現在の七つの行政村）の人口は三三三七戸、一万六〇三〇人であった。しかし、そのうちの漢族人口はわずか一三九二人であり、「回族」の人口は一万四六三八人であり、七つの村の人口の九一%強、陳埭人民公社全人口全体の二三%以上を占めていた。回族の割合が非常に高いため、現在この七つの行政村は「回族村」とも呼ばれている。

ただ、人民公社当時の回族住民も漢族住民と変わらず農業を営み、そして漢族よりも生活の面において困窮していた。「埭」とは「干拓地」であり、「陳埭」は本来典型的な稲作地域であった。しかし住民一人当たりの農地面積が極めて少ないため、陳埭人民公社は有名な「高産窮郷」であり、収穫量が高いが生活状況の面では他の地域より貧しかった。陳埭鎮が提供した統計資料によれば、陳埭人民公社当時、公社全体の農地は三万二七九ムー（一ムーは六・六六七アール、一五分の一ヘクタール。そのうち水田が三万一八七五ムー）であり、一人当たりの農地はわずか五・三七七ムーであった。ここで注目すべきは、地域概念としての「陳埭」つまり「回族七村」の一人当たりの農地面積が、陳埭人民公社全体の平均よりも少なく、〇・四九ムーに過ぎなかったことである。

当時の「陳埭」の七つの生産大隊自然村には三二一〇

ムーの干潟と一一五三ムーの湖沼地があったが、農地は七九三四ムーであり、一人当たりにすると、江頭村が〇・七一ムー、溪辺村が〇・四八ムー、岸兜村が〇・四八ムー、鵬頭村が〇・五〇ムー、西坂村が〇・四五ムー、とくに四境ではわずか〇・二九ムーであった。そのため、一ムー当たりの農作物収穫量は、一九七八年が八三六・五キロ、一九七九年が一〇一七・五キロ、一九八〇年が一〇〇四・五キロ、一九八一年が九五四キロ、一九八二年が一〇四二・五キロ、一九八三年は虫害にあったが九四二・五キロだったなど、高い単位収穫量が維持されてきたにもかかわらず、一人当たりの一年に利用できる食料は三二六・八キロ、三〇八・三キロ、三〇〇キロ、三三三・五キロ、二八二・五キロに過ぎず、貧困状態が続いていた。当時、「農業なら（困難を克服して奮闘し続けるモデルとされていた）大寨に学び、闘争なら陳埭に習う」という諺ができたぐらい、他宗族との「械闘（武力衝突）」が頻繁に起こるなど、陳埭においては社会の貧困と不安定が双子のように存在していた。

二 経済開発の潮流に乗る

しかし、六〇年代や七〇年代に貧しかったにもかかわらず、陳埭人民公社の中心は「陳埭」に据えられていた。そ

こにあった宗族間の力学などについての検証は別稿に譲るが、一九七八年末からの改革開放時期に入ってから「陳埭」が陳埭鎮の政治的中心（鎮政府所在地）の地位を維持できた最も重要な理由は、「陳埭」が経済開発において周辺地域を圧倒する大きな経済的実力を身につけ、陳埭鎮の経済成長センターの役割をずっと果たしてきたことにあると考えられる。

一九八七年に陳埭鎮全体の工・農業総生産は一・四五億元だったが、二〇〇二年に七三億元、二〇〇六年に一八五・六億元で、年平均二六・二％増加した。また、納税額は二〇〇二年に三・〇六億元だったが、二〇〇六年に七・八二億元で、年平均二六・四％増加した。二〇〇六年の陳埭の工・農業総生産や納税額は、それぞれ晋江市のトップだった。⁷⁾しかし下記のデータからもわかるように、もし七つの回族村からなる地理的「陳埭」がなければ、あるいはこの行政単位の中心的な地位を占めなければ、「陳埭鎮」の輝かしい経済発展もありえなかったことがわかる。

二〇〇一年、陳埭鎮の工・農業総生産は一〇八・五億元だったが、そのうち回族七村が五八・八九億元で鎮全体の五四・三％を占めた。納税額は鎮全体が五・〇九億元で、そのうち回族七村が三・〇六億元で六〇％を占めた。鎮全体の輸出は大きく伸びて四六億元に達したが、そのうち回族七村も前年の一六・七億元から二七・五億元に成長し、鎮全

体の五九・八％を占めるようになった。この年、陳埭鎮において年納税額が五〇〇萬元以上の企業は六社だったが、そのうちの四社が回族七村の企業で鎮全体の六七％を占めた。また同じ年、回族七村には年生産額が一千万円以上の企業は五五社、一億元以上の企業は一二社もあった。⁸⁾

二〇〇六年に陳埭鎮の工・農業総生産は一八五・六億元で、そのうち回族七村が二〇〇五年の七五・五億元より三〇％増の九八・三七億元になり、陳埭鎮全体の五二・八％を占めた。⁹⁾納税額は七・八二億元で、そのうち回族七村が四・六三億元で（二〇〇五年より二四・五％増）鎮全体の五九・二％を占めた。¹⁰⁾この年に陳埭鎮で生産額が一億元を超えた企業四〇社のうち、四七・五％に相当する一九社は回族七村の企業であった。中国著名商標を取得した企業は陳埭鎮に二七社あり、その六三％に相当する一七社が回族七村の企業であった。また、福建省著名商標を取得した企業は二八社あり、その七五％に相当する二二社が回族七村の企業である。福建省ブランドは一四種で鎮全体の一九種の七四％を占める。国の機関による品質チェックが免除された製品は、陳埭鎮に二〇品目あり、その七五％に相当する一五品目が回族七村の企業による製品であった。¹¹⁾回族七村の企業が生産する「徳爾惠」、「361度」、「金萊克」、「安踏」などの製品（いずれも靴）は「中国の最も価値があるブランド・リスト500」に入れられ、「安踏」運動靴は全国のス

ニーカー市場において五年連続全国一の市場シェアを占めていた。¹³二〇〇九年現在、陳埭鎮の九社の企業が中国や香港そしてその他の国の株式市場に上場し、そのなかに回族七村の企業は五社あった。¹⁴陳埭鎮は現在中国の「鞋都」（靴の都）を誇っているが、それに対する回族七村の貢献が大きいことは明らかである。¹⁵

一連の経済開発を通じて陳埭鎮はますます豊かになり、国家財政に対する貢献も年々増えたが、その納税額における回族七村の割合もいつも変わらず大きいものであった。一九九四年は鎮全体が二五四四万元であり、回族七村が一九〇八万元だった。二〇〇三年は鎮全体が五・〇九億元であり、回族七村が三・〇六億元だった。陳埭鎮の経済発展は、当然多くの外来の工場労働者人口によって支えられたものでもあるが、陳埭鎮における回族七村人口の少なさとその強い経済力は非常に対照的である。

二〇〇三年に陳埭鎮の人口は七万八〇〇〇人であったが、回族七村の人口は二万二一〇〇人で鎮人口全体の二八・四％しか占めていなかった。世帯総数が五五八〇だった陳埭の回族は、この年までにすでに九三二社の企業を作り、この年に中国がSARS（重症急性呼吸器症候群）に見舞われたにもかかわらず著しい経済成長を遂げた。¹⁷陳埭鎮においては回族人口の上昇率が明らかに漢族を上回っている。不完全な統計資料によるものではあるが、陳埭の回

族人口は二〇〇四年に二万二三〇〇人を上回り、¹⁸二〇〇六年に鎮全人口の三〇・七％を占めるようになっていた。ちなみに、回族七村の面積は約一二平方キロメートルで鎮全体の三〇・九％に過ぎない。¹⁹

陳埭回族七村の二〇〇六年の工・農業総生産は九八・三億元であり、中国の改革開放が始まった一九七八年の三五二万元に比べると二万七九四五倍にも増加している。経済的に豊かになったことは、回族七村の普遍的な現象であった。²⁰回族七村の経済発展にともなって住民の平均年収も増え、しかも周辺の漢族村住民を上回った。一九九四年に回族七村の工・農業総生産は一〇・〇五億元であり、住民一人当たりの年収は四四七八元だった。²¹二〇〇〇年に回族七村の工・農業総生産は三一・〇八億元に達し、一人当たりの年収は七五八一元に達した。²²二五の行政村と二八〇社以上の企業を有する陳埭鎮においてだけではなく、晋江市においても他の地域に経済力の格差を付けたことが一目瞭然である。例えば、二〇〇六年に陳埭回族七村の一人当たりの平均年収は一万七五元となったが、晋江市の他の五つの民族村の平均年収は七三〇六元に過ぎなかった。²³

経済力の成長にともない回族七村の社会福祉も向上した。溪辺村は一九九三年から六〇歳以上の高齢者一七五名を対象に毎月「養老金」（老人補助金）を支給し、そして年一回の無料健康診断と福建省内観光を実施し、福建省で

はじめの「農民養老金制度」を制定した村となった。その後、回族七村ではそれぞれ老人協会が設立され、西坂と四境などの村も相次いで「養老金」の制度を導入し、高齢者に対して月に一人五〇元から六〇元を支給している。現在、回族七村の老人は祝日祭日ごとに老人協会から三〇〇〜五〇〇元の慰労金が支給され、そして福建省内の旅行と健康診断を年に一回無料で受けている。また、回族七村は「回族身体障碍者協会」を設立し、三七〇名以上の協会員に対しても祝日祭日ごとに補助金を出している。

三 工業化の先頭を走る

中国各地の経済開発と同じく、陳埭鎮の経済発展は基本的に工業化の道を進むことにあり、回族七村も例外ではなかった。一九七八年に陳埭回族の七つの生産大隊の工・農業総生産は二八五・九万元であり、そのうち、農業と工業・副業（魚貝類の養殖）による部分がそれぞれ四八・五%と五一・五%を占めていた。しかし一九八二年には工・農業総生産が一〇一三・二万元に上昇し、そのうち農業によるものはわずか一七・二%にまで下がった。一九八三年には陳埭の回族農民が共同出資して起こした企業が七七社にまで発展した。この年に陳埭回族の七つの生産大隊の企業就業人口は二八九六人に上り、その労働力総数の

四六・六%強になった。一九八三年の「郷鎮企業」による工業総生産は八七七・九九万元に達したほか、魚貝類の養殖など「副業」による収入も一九七・九万元に達した。二〇〇〇年、「回族七村は揃って村の工・農業総生産が一億元を突破した」²⁶。回族七村の工・農業総生産のうち、企業による部分は三〇・八〇億元であり、農業総生産はわずか一億元で三・二一%に過ぎなかった。農業技術の向上や機械化、自流水灌溉の実現などにもなつて土地が一部の農民に集中し、この年までに、回族七村の農地総面積の七〇%以上に当たる四二〇〇ムー以上の農地が五四の農家によって請け負われ、九〇%以上の農業労働力が企業の経営者や従業員に変身した²⁷。この年、回族七村の「郷鎮企業」の数は

1983年陳埭回族七つの生産大隊の労働力人数

隊別	人口数	人口総数	労働力総数	企業就業人口
江頭	3,510		1,607	635
溪邊	2,070		885	180
岸兜	3,134		1,420	278
鵬頭	1,669		410	413
西坂	970		410	203
四境	2,678		898	555
花庁口	2,169		580	632
合計	16,200		6,210	2,896

出所：廈門大学『晉江県陳埭公社回族調査報告』（ガリ版、1984年）8、70頁より作成。

九三五社になり、七つの村を結ぶコンクリートの道路がで
き、溪辺から西坂・四境を通って晋江市街地に繋がる幅三
六メートルの「製靴材料大通り」ができ、ここに三〇〇以
上の店が集中し、中国三大製靴材料市場の一つになり、回
族七村はかつての貧しい農村から「都市化へと大きく邁進
した」。「走去国門」（国境を越えて商売を）というスロー
ガンのもと、かつて農村だった陳埭でつくられた工業製品
がアメリカ、南アフリカ、欧州、香港など二一の国家と地
域に輸出され、国際市場もますます切り開かれていった。

工業化と都市化のプロセスの中、二〇〇七年の陳埭鎮の
工・農業総生産二二八・六五億元のうち、工業総生産が二
二八億元なのに対し、農業総生産はわずか〇・六五億元で
あり、総額における割合は〇・二八%へと下がった。この
年、回族七村の工・農業総生産は一二二・七八四億元とな
り、鎮全体の五三・七%を占めた。しかし注目すべきこと
は、回族七村の工業総生産が一二二・五六億元で鎮の工・
農業総生産の五三・六%を占めるのに対し、農業総生産は
〇・二二四億元で約〇・一%を占めるに過ぎないことであ
る。つまり回族七村では、工・農業総生産に占める農業総
生産の割合は〇・一八%であり、鎮全体の〇・二八%より低
かったのである。二〇〇九年にこの差はさらに拡大し、鎮
全体が〇・二九%だったのに対し、回族七村では〇・一五%
となった。回族七村にも、一人で四〇〇〇ムー以上の農地を

請け負った人がいるように、かつての農業方式と決別して
農業を企業化した人もいた。それによって陳埭鎮は現在で
も食糧の自給自足を保つことができ、全国のモデル農村と
して表彰を受けたこともある。回族七村では、企業化した
農業を営む村民もいる一方で、陳埭鎮の他の村々に比べ
て、工業化の程度が明らかに高かったのである。

二〇〇七年の生産額を見ると、陳埭鎮で一億元を超えた
企業は四一社あり、そのうち回族七村が二一社で鎮全体の
五一・二%を占め、三億元を超えた企業は四社、そのうち
回族七村が三社で鎮全体の七五・〇%を占めた。納税額か
ら見れば、回族七村の企業による金額は、陳埭鎮全体の納
税額である八・六〇八億元の五九・〇%に当たる五・〇八億
元を占めた。二〇〇八年の陳埭鎮の農業総生産は二八六〇
萬元で、工・農業総生産の四・八%に当たる。しかしこの
年の四川大震災に際して、陳埭鎮から六五三四・四六一五
萬元もの震災救援金が出され、そのうちの五〇四四・八五
萬元が回族七村の企業による義捐金であった。そして、二
〇〇九年の時点で、陳埭鎮に九社の株式上場企業があり、
五社が回族七村の企業であった。つまり、企業の規模や生
産性からみれば、回族七村の工業化の水準は陳埭鎮の他の
村々よりはるかに高いものである。

四 「民族」の栄光

では、陳埭回族七村の著しい経済発展は、「回族」であることと関連性があったのだろうか。つまり、「回族」というシンボリックなものは回族七村の経済開発に対して役に立ったのか否か、もし役に立ったとすれば、それはいかなるもので、そしていかなるかたちで実現したのか。このような検討は、多民族国家である中国における「少数民族」の意義を考える上で、実に重要であると考える。

答えははっきりしている。まず、「少数民族」という窓口を通じて各級の政府とのチャンネルができ、陳埭回族七村が地方政府ないし中央政府から特殊な扱いを受けていることが周囲に知られ、そして「陳埭回族」の知名度を全国に向けて大幅に向上させた。次に、「少数民族」に対する優遇政策を利用して陳埭回族七村のインフラなどが改善された。最後に、陳埭回族は「少数民族」という窓口を通じてはじめて、全国的な経済活動の舞台に上り詰めることができたのである。

後述のように、一九七九年一月一九日の「陳埭回族」の身分回復を認める福建省晋江革命委員会の通達、「陳埭公社の七つの生産大隊の丁姓の回族身分を再び強調する問題についての回答」が出されてから、陳埭回族という身分

は、多くの陳埭回族の民衆を含め、はじめて広範に認識された。一九八〇年に福建省民政庁が「民族政策」の宣伝活動を行い、これを受けて陳埭人民公社も回族の歴史を宣伝する活動を行った。一九八二年に福建省政府の「民族事務委員会」が設立され、陳埭回族の代表丁文凱が委員の一人に選ばれた。この年の一二月に中共中央委員会紀律検査委員会委員の一人が福建省民族事務委員会と晋江地方政府の責任者の随伴で陳埭回族を視察した際、「陳埭回族生活用水問題」（不衛生な河川水の飲用）が報告された。そのため、福建省民族事務委員会は一二万円の「少数民族補助金」を提供し、翌年に陳埭の水道が敷かれた。

一九八七年四月、国家民族事務委員会は複数の有名な歌手が参加する「国家民族事務委員会芸術団」を陳埭に派遣して「少数民族」を慰問した。一九八八年に陳埭鎮人民政府は中国政府（國務院）によって「民族団結進歩模範單位」という表彰を受け、溪辺村の企業家丁思猛が「全国民族団結進歩模範個人」に選ばれた。そして一九九〇年九月に陳埭鎮回族の代表的な人物丁顯操（当時、鎮人民代表大會委員会委員長）も中国政府（國務院）から「全国民族団結模範個人」に選ばれた。この年の十一月一四日に全国人民代表大會常務委員会民族委員会の視察団が陳埭を訪れ、「散居少数民族平等權利保障法」の内容について意見を尋ね、また同じ月に陳埭の「少数民族」を慰問するために中

国政府から中国屈指の芸術団体「中央民族歌舞団」が派遣されてきた。

「陳埭回族」の身分回復は、学会の注意も引いた。一九八四年五月二四日から六月五日までに廈門大学人類学系が福建省民族事務委員会の委託を受けて陳埭人民公社の七つの回族大隊において現地調査を行い、『陳埭公社回族調査報告書』を提出した。一九八九年一月一八日から二〇日までにユネスコによる「海のシルクロード視察団」の先遣隊が陳埭回族を視察した。一九八九年一二月に陳埭鎮回族事務委員会が廈門大学と「陳埭回族歴史学術シンポジウム」を共同主催し、それに五〇名以上の研究者が出席し、四〇本以上の論文が発表された。³⁶このシンポジウムの成果は著名な中国社会科学出版社から出版され、副首相級の國務委員だった楊静仁が『陳埭回族史研究』の書名を題した。一九九一年二月一六日、一七日にユネスコによる「海のシルクロード視察団」は泉州視察の重点地域として陳埭回族を視察した。陳埭回族はモスクを建てて道路をアスファルトで補修するなど準備万端の体制で迎え、視察団の責任者と同行したサウジアラビア大使をはじめとする四か国の大使は落成したばかりの「陳埭モスク」の前で記念植樹を行い、「友誼長存」の記念碑を建てた。一九九四年二月二五日、泉州の「海のシルクロードとイスラーム文化国際学術シンポジウム」に出席する各国の学者は陳埭回族を視察

し、一緒に陳埭のモスクでラマダン月の礼拝を行い、丁頭操にユネスコからの勳章が贈られた。

事实上、陳埭回族は知名度を高めるとともに多くの実利も同時に享受した。これは学校教育の面においてとくに顕著に見える。一九九五年四月二〇日に国家民族事務委員会教育局長は全国の六つの民族大学学長をはじめとする二二人から構成された教育視察団を引率し、陳埭の「民族教育」の現状を視察した。一九九八年に陳埭民族中学校が泉州市人民政府から「民族團結進步模範單位」に選ばれ、一〇月に福建省民族事務委員会が陳埭の民族教育の発展のため八万円の「少数民族補助金」を提供した。一九九九年一月に陳埭岸兜村の求聡中心小学校が「福建省農村小学校モデル学校」に選ばれ、二〇〇一年に陳埭四境村の阿梅幼稚園が「福建省標準幼稚園」に選ばれ、そして陳埭民族中学校が二〇〇一年一二月に「全国民族中学校モデル学校」になった。³⁷また、二〇〇二年六月二日の陳埭回族からの直訴意見を受けて、二〇〇三年四月に福建省人民政府が「陳埭鎮に居住するあらゆる回族の受験生は大学受験において二〇点の加点をうけることができる」との決定を下した。「少数民族」という窓口を利用して経済活動に積極的に乗り出すことも、陳埭回族の大きな特徴であった。一九八七年一二月に全国政治協商會議副主席・国家民族事務委員会主任スマイ・アイマイティが民族経済代表団を引率して

陳埭を訪問し、一九八八年四月と一九八九年九月に陳埭鎮回族事務委員会の引率で陳埭回族の企業が二回にわたって北京で開かれた「中国全国少数民族用品および少数民族地区名・特・優製品展示販売会」に出展した。一九八九年五月に陳埭花庁口村の回族企業経営者丁天水は、中国国家民族事務委員会と中国国家廣播電影電視省局が共催するキャンペーンで「第一回全国優秀少数民族企業家」に選ばれた。一九九一年一月三十一日に全国民族事務委員会副委員長をはじめとする視察団は陳埭回族を視察し、その経済開発を高く評価した。一九九三年一〇月七日に、中国国家民族事務委員会は「全国少数民族優秀企業経営者」に選ばれた一・二・三人の企業家を連れて陳埭回族を視察させた。一九九八年七月二日に寧夏回族自治区主席馬啓智は、多くの企業家を含む四四人からなる寧夏視察団を連れて福建省・泉州市・晋江市の政府指導者の案内で陳埭回族の企業を視察し、九月一六日に中国国家民族事務委員会副主任江家福などが陳埭にて「少数民族地区経済発展情況」をテーマに現地調査を実施し、陳埭回族の経済発展を高く評価した。

一九九四年八月に陳埭鎮回族事務委員会が中国政府（國務院）から「全国民族團結進步模範單位」の表彰を受けたが、その背景にあったのは実に経済開発の「成功」だった。つまり、一九九三年に陳埭回族七村の工・農業総生産が六・三九億元に達し、陳埭鎮全体の五つの「億元村」のう

ち回族村が四つを占めた。回族村民一人当たりの平均年収は三四七八元に達し、周辺の村々をはるかに上回った。このようにして、陳埭回族の経済発展が全国的に宣伝され、中国少数民族による経済開発のモデルになったのである。

五 「民族」の名で回復された「宗族」

現在、陳埭回族の企業は、商品流通だけでなく、資金の調達も国際的に展開している。すでに五社は国外の株式市場に上場した。しかし注目すべきは、陳埭回族の上場企業はみな中国国内ではなく、三社が香港、二社がマレーシアの株式市場に上場したことである。そこで当然問われるのは、陳埭回族とこの二つの国や地域との国際的なネットワークがいかに構築されたのか、ということであろう。ここにあったのは、「民族」の名で回復された「宗族」の力である。

陳埭回族の非常に重要な特徴は、全員「丁」という統一した姓氏をもち、つまり一つの男系の祖先から来た血縁集団——「丁氏宗族」——であることにある。陳埭回族の人口は一九八三年に一万四〇〇〇人余りだったが、現在すでに二万人を上回ったともいわれる。陳埭に居住する丁氏族の歴史については別稿で詳細に記録してあるが、ここでごく簡単に触れておこう。

陳埭の丁氏回族は、アラビアから中国にきたイスラム教徒の後裔である。その先祖については、第十世の丁衍夏が執筆した「族譜記略引」によれば、彼がかつて「毅祖」によって著された族譜の草稿を見たことがあり、その草稿に、われわれの祖先は中国に入ってきたムスリムであるサイデンチであり、その後裔にジャンスデン（瞻思丁）という人物がいて、それによって「丁」という姓氏を取ったと記録されているという。丁氏第一世の名は丁謹（字は慎思、号は節齋）であり、南宋理宗の淳祐十一年（一二五二）に生まれ、元來蘇州でシルクの貿易を営んでいたが、南宋度宗の咸淳年間（一二六五～一二七四）に当時中国で最も大きな港湾都市である泉州に移住した。丁氏の第二、三、四世はいずれも男兄弟がなく、第四世の丁善の時、一族が泉州城南、つまり陳埭に移住し、時は元末だった。陳埭に移住してきた丁氏一族は、農業化（かつての商人から農民へと転身）、現地化（現地の宗族との友好関係を築くため潮を防ぐ堤防工事を行うことなど地元の公共事業に多く貢献）、宗族化（世代ごとの名前の区別、祠堂の建立、族譜の作成など宗族の形成に関する諸行事の完成など）、そして「科挙化」（一族の利益を守るため子弟への儒学教育に力を入れ、科挙官僚の登竜門である「進士」を第八世から出した）というプロセスを経て完全に「漢化」し、そして陳埭の最も大きな宗族へと成長した。

しかし、中華人民共和国期に入ると、かつての宗族間の「械闘」、または権力に挑戦できる勢力が現れるのを防ぐために「宗族」の組織がほぼ完全に崩壊させられ、宗族を単位に行われてきた伝統的活動も全面的に禁止された。ところが、「陳埭回族」という身分回復にもなつて、「丁氏宗族」を思い起こさせるようなシンボリックなもの、例えば丁氏祠堂や丁氏祖先の墓地などが、「少数民族の伝統文化」（しかも非常に特徴的である伝統文化）に読み替えられた。

一九八三年六月に岸兜村にある陳埭丁氏祠堂（明代の永樂年間（一四〇三～一四二四）に建立され、万曆十八年（一六〇〇）に建てなおされた）が、晋江県「文物保護単位」（有形文化財）に指定された。そのため、陳埭鎮人民政府は本来祠堂を校舎とした「聚書小学校」に新しい校舎を提供し、一九八四年に県政府が三万元を支出して丁氏祠堂に対する大規模な修繕が行われた。一九八五年三月一日に県級文物保護単位丁氏祠堂を利用して「晋江県博物館陳埭回族史館」（略称は陳埭回族史館）が創設され、陳埭回族の形成、發展史、歴史上の有名人、および中国の改革開放政策が実施されてから陳埭回族が勝ち取った成果と海外華僑の貢献が全面的に紹介され、福建省民族事務委員会顧問の陸維特、晋江県書記齊世和が開館式でテープカットを行った。一九九一年四月に丁氏祠堂は福建省文物保護単位に指

定され、「福建省回族のうち最も歴史が長く、最も規模が大きく、しかも中国建筑とイスラーム装飾を一体に融合した回族の祖廟」として、同済大学が編集した『中国民族建築辞典』に収録された。そして二〇〇六年五月に全国文物保護単位（国の有形文化財）に認定された。

一九九四年二月に「海のシルクロードとイスラーム文化国際学術シンポジウム」の開催に合わせて、二〇〇〇名以上の陳埭回族が泉州市の靈山で丁氏一、二、三世先祖の墓参りを行い、中国全国政治協商会議常務委員会委員黒伯理が出席し挨拶をした。二〇〇一年六月に「陳埭丁氏靈山回族祖墓群」が泉州市文物保護単位に認定された。二〇〇二年一月一三日に泉州市政府が「専門会議」を開き、「陳埭丁氏靈山回族祖墓群」の周囲の環境の整備などについて「泉州市人民政府專題會議紀要」（泉政專二六〇号文）を出し、「陳埭丁氏靈山回族祖墓群」を保護するために「三つの注意すべき面と七カ条規定」を制定した。そして、二〇〇五年五月に「陳埭丁氏靈山回族祖墓群」（第一〜六世の墓）が福建省文物保護単位に登録された。

「祠堂」と「祖墓」の文化的価値が認められるにつれて、「民族」の名を借りて丁氏宗族も事実上復活した。とくに注目すべきは、「祖先祭祀」と「祖先の墓参り」を通じて「陳埭回族」が海外に移住した「陳埭丁氏」（事実上後裔）とのネットワークを築けたことである。

一九八五年六月に丁魁梧を団長とする「フィリピン帰郷親族訪問団」、八六年四月に丁玉郎を団長とする「旅菲聚書丁氏宗親会」が相次ぎ陳埭を訪問し、八七年一月に「旅菲清真五姓連宗会」（フィリピンに僑居するイスラーム教徒五宗族連合会）の招聘を受けて、丁思源を団長とする陳埭鎮回族事務委員會の祝賀団がフィリピンを訪問し、「五姓連宗会」設立三十五周年の式典に出席した。一九八九年五月に「旅菲聚書丁氏宗親会」「旅菲清真五姓連宗会」「旅菲晋江陳埭同郷会」の代表団が陳埭を訪問し、「陳埭回族の身分回復十周年」の式典に出席し、「陳埭民族文化宮」の建設のために人民幣一二・五万元を寄付した。一九九一年七月に「旅菲聚書丁氏宗親会」の招聘を受けて、丁顯操を団長とする「祝賀団」がフィリピンを訪問し、フィリピン丁氏祠堂の落成式典に出席した。一九九五年五月に丁顯操などがタイで「泰国丁氏宗親会」を訪問したほか、マレーシアで「マレーシア・イスラーム教育基金会」と「イスラーム博物館」「マレーシア民俗博物館」を見学し、海外のイスラーム教徒や国際社会におけるイスラームに対する認識水準を高めたという⁽⁴⁾。

一九八九年三月に陳埭鎮回族事務委員會が七村の村民委員會主任（村長）を引率して香港にて視察を行い、同年七月に台湾に居住する民国時代の晋江梟長丁維禧が、香港在住の丁子対、丁深蘇などの「宗親」（同じ宗族で血縁が繫

がつている親戚という意味」と同伴して陳埭に帰省した。

一九九五年九月、丁東徳を团长とする「台湾丁氏宗親尋根之旅訪問団」が陳埭を訪問し、「陳埭丁氏祠堂」と「陳埭丁氏靈山回族祖墓群」を参り、「海峡兩岸丁氏宗親座談会」を開いた。

陳埭回族の経済開発に対し、その初期において海外にいる「丁氏宗親」が多くの経済援助をした。例えば、海外の丁氏宗親による教育投資は、一千万人民元以上に達したともいわれる。シンガポールの丁慶座は幼稚園の建設に百萬元を寄付し、フィリピンの丁木徳は小学校の建設に百萬元を出資した。教育だけではなく、海外の丁氏宗族による財政援助はまた、「丁氏族譜」の編纂、丁氏祠堂の建設、陳埭丁氏回族史館の建設などにも多く見られた。そして、陳埭回族の企業の海外市場に際しても、こうした海外に居住する丁氏との宗族ネットワークが大きな役割を果たした。

例えば、現在陳埭丁氏のなかで最も実力がある「安踏グループ」の香港株式市場上場（二〇〇七年七月）は、まさに台湾香港中華経済交流協会会長・香港力宝グループ顧問である丁楷恩の力を通じて実現されたものであった。丁楷恩の祖先は陳埭岸兜村の出身であった。「安踏グループ」の創始者丁和木も同じ岸兜村の人であり、つまり、丁楷恩と丁氏宗族のなかにおいてもより血縁が近い同じ「房」に属する丁氏一族であった。

丁楷恩は香港財界においてかなりの発言力をもち、また有名な会計事務所に強い影響力をもつ人物と言われた。しかし注目すべきは、丁楷恩の「宗親」意識は最初決して強くなかったことである。彼と「宗親関係」で繋がるために、陳埭回族は実に大きな努力を払った。一九九六年三月二十九日、丁楷恩が福建莆田にいることを知り、丁顕操など陳埭回族の代表人物は直ちに莆田を訪れ、「陳埭丁氏靈山回族祖墓」の墓参りを強く要請した。墓参りが三〇日の午前に行われ、午後に丁楷恩は陳埭を訪問し、陳埭民族中学校において奨学金を設立した。それによって陳埭回族と丁楷恩との関係が長く続いてきて、その間に陳埭回族の企業が香港の株式市場の上場を果たしたのであった。

陳埭回族と海外華僑とのネットワークの構築において、「宗族」が重要な因子として大きな力を発揮したことは違いないが、ところが、それは「少数民族」という名のもとにはじめて実現され、結果的に陳埭回族の経済発展に繋がったことも事実であった。

六 「民族」の再発見

しかし注目すべきは、「陳埭回族」が人民共和国期に入ってから正式に認められていたにもかかわらず、彼らが自分の「民族」をかつて一度「忘却」していたことであ

る。陳埭回族は現在「文化大革命後」恢復民族成份（文革の終了後、回族であることが再び認められた）と言っている。しかし事実上、これに關する「福建省晉江縣革命委員會」によつて一九七九年一月一九日に出された第四号通達は「關於重申陳埭公社七個大隊丁姓回族問題的批復」（陳埭公社の七つの生産大隊の丁姓の回族身分を再び強調する問題についての回答）であつた。「恢復」ではなく「重申」（再び強調する）という文言は、政府として「陳埭回族」の身分を否定したことはないという意味で使われた。通達の全訳文は次の通りである。

陳埭人民公社革命委員會…一九七九年一月一九日の陳埭公社七つの大隊の丁姓が回族であることを重ねて声明する報告書を受け取つた。調査研究の結果、陳埭公社に所屬する七つの大隊の丁姓が確かに回人の後裔であることが確認された。本委員會は上級の指示に基づき、民族政策を真面目に貫徹し実行するため、陳埭公社の岸兜、鵬頭、江頭、溪辺、西坂、四境、花庁口など七つの大隊の丁姓が回族であると再び強調することを決定した。貴方々が社員たちに対し、各民族間の團結の更なる強化、社会主義建設の推進、よつて四つの現代化の実現を早めることに対して貢獻するように、広範に教育を施すことを望む。

「忘却」したのは、政府ではなく陳埭回族自身であつ

た。その背景にあるのは、一九五〇年代に丁姓一族が決して喜んで「少数民族」の身分を受け入れようとはしなかつたという歴史の経緯である。人民共和國時代に入つてから、政府は陳埭の丁氏一族が「回族」であると考え、一九五三年に中国政府による「民族識別」の動きのなか、福建省政府民政庁からも相次ぎ二つの調査チームを陳埭に派遣してきた。しかし、生活の慣習の面においてもかなり漢化していたため、「回族」であることは当時陳埭の丁氏の人々によつて拒否された。「すでに大昔の歴史なので、いままたそれを提起することは何のためだ」と、自分たちが「少数民族」と見られることは堪えられないことと考へていた。同じ発想のもと、彼らは「回族」であることを外に對して積極的に言わず、自分たちもそれを「忘却」するよう努力した。

当事者の希望を尊重するため、調査チームは「回族」であるか否かに關して明白な結論を避けて「陳埭の丁姓から『回族成份』に対する希望はなかつた」と報告した。ところが、陳埭人民公社には二四の大隊と一つの華僑農場（帰国華僑を收容するための農場）があつたにもかかわらず、毎年、岸兜、鵬頭、江頭、溪辺、西坂、四境、花庁口の七つの生産大隊（現在の回族七村）を特別扱ひした。例えば、七つの生産大隊の生産状況と社会状況を毎年個別に統計して⁶⁷いた。このことを見れば、政府はそれが「少数民

族」であると考えていたが、しかし丁姓の民衆がそれを認めようとしなかったため、政府部門も積極的に提起することができなかつたことがわかる。事実上、政府のこうした態度は、後に「陳埭回族」がその「歴史記憶」を再び蘇らせるきっかけともなつた。

では、なぜ一九七九年初という時期に「陳埭回族」が「重申」されたのか。これは、やはり「陳埭回族」自身の「少数民族」になりたいという気持ちに基づいて行われたことであつた。では、この時期にそのような気持ちはどうして湧いてきたのか。それは、実に当時の中国が大きな転換期を迎え、経済改革と対外開放に舵を切り替えたことに関連している。貧困を凌ぐため、政策の許される限り、七つの生産大隊は以前から農業以外の「副業」を行つていた。⁽⁴⁸⁾これを基礎に、一九七八年に「隊弁企業」(生産隊が経営する企業)を起こそうと考えていたが、しかし企業を起こすための資金に困つていた。そのとき偶然、晋江県政府民政局の関係者から次のことを告げられた。県民政局の予算のうち、実は毎年一萬元前後の少数民族に対する特別予算があることと、それは主に陳埭回族のために設けられた特別予算であつたが、使用の申請が一度もなかつたため毎年返上されていたことである。それを聞いて「陳埭回族」はすぐに申請し、それを最初に受けた溪辺大隊は製紙工場設立の資金にした。

この経費の存在が知られると、当然のように、他の丁姓が多数を占める生産大隊もそれを求め、平等公平に使うための協議も行われ、「少数民族」になりたいという気持ちが湧いてきた。一九七八年下半年、七つの大隊が陳埭人民公社に申請書を提出し、「少数民族」である身分を回復するよう求めた。しかし、民政局から一九五三年の時点で陳埭の丁姓がすでに「回族」であると認められており、そのため「恢復」という本来根拠がないことは必要ではないと言ひ渡された。にもかかわらず、「再び強調する」こともそれなりの重要性をもつと認識され、陳埭人民公社が丁姓の要望に応えるため、晋江県革命委員会に「陳埭公社七つの大隊の丁姓が回族であることを再び強調することについての報告書」を提出し、そこで晋江県革命委員会から「陳埭公社の丁姓の回族身分を再び強調する」という言質を取り出した。

晋江県革命委員会の「回答」は「陳埭回族」に対して大きな刺激となつた。当時陳埭人民公社の工商管理所の責任者だつた丁国標(正式な「国家幹部」、つまり公務員)が先頭に立つて、七つの大隊の回族社員がそれぞれ自分の村から行進し、陳埭人民公社の本部所在地で合流するといふ、大規模な「祝賀大会」を開くことが企画された。しかし晋江県革命委員会はこの企画を知り、わざわざ「四カ条指示」という方針を出した。それは、(1)宗族を單位に連絡

を取り合うような封建主義的な行為を起してはいけないこと、(2)社会の安定を維持するために宗族間の「械闘」を引き起こしてはいけないこと、(3)祝賀活動を派手にやって浪費するのに反対すること、(4)行進をしてはいけないこと、であった。「陳埭回族」以外、晋江県にはほかに回族がいなかった。晋江県の回族といえ、事実上「陳埭回族」、つまり「丁氏宗族」であった。しかし「宗族」の活動は、当時なお許されない時代であった。「陳埭回族」がつまり「丁氏宗族」であったため、融合策を取らなければならぬ「民族問題」と、厳しく取り締まるべきと思われていた「宗族問題」に同時に直面したことから、県革命委員会は躊躇せざるを得なかった。

しかし事実上「宗族」の復活を警戒する晋江県革命委員会の方針に対し、丁氏宗族は「民族」の論理を持ち出してそれを乗り越えようとした。晋江県革命委員会の方針を伝えるために陳埭にやってきた県の幹部に対し、会場にいた丁国標は真っ向から反論した。「方針第一、二、三条については異議がないが、第四条には絶対反対だ」、「われわれは宗族ではなく、民族だ」、「中国共産党の民族政策が陳埭において貫徹されたことの祝賀がなぜいけないのか」、「中国共産党の民族政策が陳埭において貫徹されたことに対してわれわれは絶対大規模な行進を行って祝賀する」と。行進すれば県革命委員会の要員が集会に出席できなくなるとい

う県革命委員会の脅迫に対し、「これはまさに少数民族に對する差別であり、上級部門に訴える」と丁国標はその場で言明した。結局、一九七九年五月五日に「陳埭回族」による大規模な行進が行われ、「民族」を楯に取られた晋江県革命委員会は結局委員会副主任を出席させ、祝賀大会が盛大に開かれた。

祝賀行進と祝賀大会を最初に企画したのは丁国標であった。この企画を実現するため、彼は七つの生産大隊の党書記および大隊長と連絡を取り合っていた。それが基礎になって、祝賀大会の後、丁国標と七つの生産大隊の責任者から構成される「陳埭回族委員会」が五月五日の当日に組織された。江頭大隊党書記の丁玉烏が委員会主任に選出された。ここで注目すべきことは、なぜ丁国標が「陳埭回族」に對して大きな熱意を示したのかということと、なぜ岸兜生産大隊の党書記丁文儉が本来なりたくないにもかかわらず副主任に選ばれたのか、という二つのことである。

丁国標の「陳埭回族」に對する熱意は、「少数民族」というシンボルが経済開発の契機をもたらすことを察知し、実にその「工商管理所責任者」という職業からきた鋭い感覚に由来するものであった。彼の話を借りて言えば、「国家の少数民族に對する優遇政策を利用して民族経済を活性化させること」であった。そして、「宗族活動」と言われ

るのを恐れて回教委員会副主任への就任を固辞していた岸兜生産大隊の党書記丁文愉が、最後にやむを得ず就任した理由は、丁氏祠堂が彼の村——岸兜村にあったためであった。⁵⁰この二つの事実からも、「陳埭回族」による「少数民族」の再発見の出発点は、経済開発と発展にあったことがわかる。

おわりに

一九八七年四月二十五日に「陳埭伊斯蘭教協会小組」は「陳埭穆斯林」(陳埭ムスリム)というガリ版刷りの新聞を発行しはじめ、その「発刊の詞」から「小組」がまさにこの時期にはじめてできたことがわかる。⁵¹『陳埭穆斯林』の内容はイスラームの基礎知識、丁氏宗族のイスラーム信仰に関する歴史事件、イスラーム祭日の活動内容、そして外部から来た指導者や学者による陳埭回族についての視察活動であった。注目すべきは、『陳埭穆斯林』が第七号を発行したのち、一九九三年六月一日発行の第八号から『晋江穆斯林』へと改称され、発行の日付も西暦とイスラームのヒジュラ暦が併記されたことである。この号の巻頭に掲載された「読者に告げる」によれば、改称の理由は「晋江市伊斯蘭教協会」がこの時期に設立されたことである。実は、晋江市伊斯蘭教協会は陳埭鎮に設けられ、その会長も

丁氏一族の丁金順であり、彼のもう一つの肩書きは陳埭清真寺(モスク)管理委員会の副主任であった。晋江市伊斯蘭教協会の事務室も、ずっと陳埭鎮回族事務委員会の建物の中にあつた。こうして、かつて陳埭の一「小組」だった組織が晋江市の「協会」へと変身し、「イスラーム」のイメージを活用して陳埭の丁氏一族が「回族」、そしてイスラム教徒の代表となったのである。

しかし、「陳埭回族」が「重申」されたとき、丁氏のかなには一人のムスリムもいなかった。当然、ムスリムが礼拝する場所としてのモスクもなかった。一九八二年に「福建省第一回伊斯蘭教代表大会」が召集され、「福建省伊斯蘭教協会」が設立された。陳埭回族も代表を派遣して大会に出席させ、それをきっかけに「陳埭伊斯蘭教協会小組」ができた。この「イスラーム小組」は外地から教長(イスラーム学者)を招聘し、丁氏祠堂の裏庭を利用して礼拝を行った。一九九〇年に「陳埭鎮回族事務委員会」が「陳埭伊斯蘭教協会小組」のモスク建設の申請に同意し、建築面積が一七三・六平方メートルからなる「陳埭清真寺」が丁氏祠堂の右後方に建設された。「陳埭清真寺」が急遽建てられた理由は、その年にユネスコの「海のシルクロード視察団」が陳埭に来ることになったことである。⁵²また、このモスクの特徴は、礼拝室が二階にあり、一階は「接客ホール」になっていることである。換言すれば、モスクはあく

まで外部に「陳埭回族」をアピールするものに過ぎなかった。一九九三年四月に「陳埭清真寺管理委員会」が作られた。管理委員会は丁氏の人々によって構成され、おそらく共産党員は入っていないが、当時の陳埭鎮回族事務委員会副委員長の丁桐志が管理委員会の副委員長も務めた。⁵⁵⁾

事実上、今日に至っても本当にイスラームを信仰する丁氏の人は二十人もいない。しかし丁氏祠堂の後方にある「海光堂」と鵬頭村にある「陳埭基督教堂」（長老会長は丁文閣、丁照顧）の信者は、ほとんどが丁氏の人であった。

イスラームは、「回族」というイスラーム民族にとって不可欠な要素であるが、しかし陳埭においては「陳埭回族」を作り上げる看板に過ぎなかった。つまり、丁氏の人々にとって、必要とされているのは宗教としてのイスラームではなく、中国の少数民族としての「回族」であった。「少数民族」というシンボルが重視された理由は、経済開発と経済発展に役立つと考えられたことにあり、そして現実的にもそのような役割を果たしたのである。

興味深いことに、「陳埭回族」が作成した文献書類には、「漢回宗親」という用語が散見される。ここから、台湾や陳埭以外の地域に移住した丁氏の後裔のなかには、自分が「回族」やムスリムであることを認めていない人も存在することがわかる。「回」または「漢」か、イスラーム教徒または仏教徒あるいはキリスト教徒か、丁氏の人々に

とって、実生活に影響を与えない限りそれは実に重要なものではなかった。陳埭回族による「民族」の再発見と「民族意識」覚醒のプロセスを通じて、経済開発があちこちで推進されている今日の中国において、「民族」というシンボルの役割は、多くの場合、経済の発展、生活の向上といった側面から求められていることがわかった。

当然ながら、「民族」の極端な強調は他の人々との交流を阻み、結局「民族」を発見した本来の目的にも障害をもたらすことになる。海外や他の地域の丁氏とのネットワークを維持するために「漢回宗親」の用語まで工夫したように、「民族」の役割について「陳埭回族」の探索はなお続いていくが、枚数制限のためそれについての分析は別稿に譲りたい。

注

- 〈1〉 その代表的なものとして次のものが挙げられる。陳埭回族史研究編集委員会編『陳埭回族史研究』中国社会科学出版社、一九九〇年、Fan Ke, "Ethnic Evolvement in a South Fujian Hui Community" in *Berliner China-heft*, Berlin, Germany, 2005, Issue 28, pp. 128-54. 範珂「泉州回民的穆斯林認同与国家政治」『江蘇行政学院学报』二〇〇九年第一期。

〈2〉 「厝」の本来の意味は「家屋」であるが、福建省南部

では大きな宗族が独自で村をなしたとき「宗族の苗字＋厝」を村名にするケースが多くみられる。

- 〈3〉岸兜の総人口は六八三戸、三二二七人、そのうち丁姓以外の漢族は三二戸、一三三人。江頭の総人口は六四六戸、三四五七人、そのうち丁姓以外の漢族は一一戸、九〇人。溪辺の総人口は六三四戸、二〇六四人、そのうち丁姓以外の漢族は六三戸、三五三人。四境の総人口は五七六戸、二六四五人、そのうち丁姓以外の漢族は二九戸、四九八人。鵬頭の総人口は三三九戸、一六四六人、そのうち丁姓以外の漢族は二戸、七人。花庁口の総人口は四三九戸、二一五一人、そのうち丁姓以外の漢族は四二戸、一八〇人。西坂の総人口は二二〇戸、九六〇人、そのうち丁姓以外の漢族は一〇戸、四一人。以上は廈門大学『晋江県陳埭公社回族調査』（かり版）、一九八四年、六頁による。

- 〈4〉廈門大学『晋江県陳埭公社回族調査』七頁によれば、一九八三年度の陳埭人民公社の居民数は一万二四二〇戸、六万二〇八人であった。

- 〈5〉廈門大学『晋江県陳埭公社回族調査』五四―五五頁。

- 〈6〉廈門大学『晋江県陳埭公社回族調査』五六―五八頁。

- 〈7〉陳埭鎮人民政府「建設社会主義新農村、促進民族經濟社会發展——陳埭鎮回族工作情况彙報」二〇〇七年三月。

- 〈8〉陳埭鎮回族事務委員會「陳埭回族社区二〇〇三年經濟与社会發展情况」二〇〇四年二月。

- 〈9〉陳埭鎮人民政府「建設社会主義新農村、促進民族經濟社会發展——陳埭鎮回族工作情况彙報」二〇〇七年三月。

- 〈10〉「陳埭鎮回族事務委員會工作彙報」二〇〇七年六月一日。

- 〈11〉陳埭鎮回族事務委員會「在〇七年陳埭回族社区新老幹部新春团拜会上的發言」。

- 〈12〉丁頭操「二〇〇七年四月一二日在陳埭鎮第七次回民代表會議上、陳埭鎮回族事務委員會工作回顧」。

- 〈13〉陳埭鎮人民政府「建設社会主義新農村、促進民族經濟社会發展——陳埭鎮回族工作情况彙報」二〇〇七年三月。

- 〈14〉以上は陳埭鎮人民政府が提供したデータである。

- 〈15〉晋江市陳埭鎮人民政府編『鞋都陳埭』出版年不明。

- 〈16〉陳埭鎮人民政府の統計によれば、二〇〇七年の陳埭鎮住民人口は七万四四〇一人、一万九八七六戸だったが、外来の工場労働者は二七万四五九二人だった。二〇〇八年の陳埭鎮住民人口は七万四七九五入、一万八〇二〇戸だったが、外来の工場労働者は二六万八三〇人であった。二〇〇九年の陳埭鎮住民人口は七万五八七五人で、一万八〇七一戸だった（この年の外来工場労働者数は不明）。

- 〈17〉陳埭鎮回族事務委員會「陳埭回族社区二〇〇三年經濟与社会發展情况」二〇〇四年二月。

- 〈18〉陳埭鎮人民政府「陳埭鎮回族工作情况彙報」二〇〇五年三月三十一日。

- 〈19〉陳埭鎮人民政府「建設社会主義新農村、促進民族經濟社会發展——陳埭鎮回族工作情况彙報」二〇〇七年三月。

- 〈20〉例えば、二〇〇三年に江頭村の工・農業総生産は一・五八八六億元であり納税額が六〇二二万元であった。

溪辺村の工・農業総生産は一〇・三六六三億元であり納税額が五三八七万元であった。岸兜村の工・農業総生産は一・八一九八億元であり納税額が六一四一万元であった。

鵬頭村の工・農業総生産は六・三三二一億元であり納税額が三二八一万元であった。西坂村の工・農業総生産は一・四〇六四億元であり納税額が七二八万元であった。四境村の工・農業総生産は七・二五〇一億元であり納税額が三七一八万元であった。花庁口村の工・農業総生産は一〇・二五一一三億元であり納税額が五三三〇万元であった。陳埭鎮回族事務委員会「二〇〇三年陳埭回族社区企業年産値統計」二〇〇四年二月。

〈21〉 陳埭鎮回族事務委員会「回漢團結拼搏、社区共同繁荣、再創新偉業、迎接新世紀」在陳埭鎮第五次回民代表會議上の報告、二〇〇一年四月二〇日。

〈22〉 同右。

〈23〉 晋江市政府「民族村基本情况表」二〇〇七年三月。二〇〇八年陳埭の回族七村の一人当たりの年収は、江頭村が一万一四七六元、溪辺村が一万一四一四元、岸兜村が一六一四五元、鵬頭村が一万一三三三元、西坂村が一万一二五八元、四境村が一万一七一〇元、花庁口村が一万一〇〇七元であった。陳埭鎮人民政府「陳埭回族社区二〇〇七年社会經濟情況統計」二〇〇八年一月。

〈24〉 陳埭鎮回族事務委員会「陳埭回族社区二〇〇三年經濟与社会發展情況」二〇〇四年二月。

〈25〉 陳埭鎮回族事務委員会「回漢團結拼搏、社区共同繁

榮、再創新偉業、迎接新世紀」在陳埭鎮第五次回民代表會議上の報告、二〇〇一年四月二〇日。

〈26〉 同右。

〈27〉 同右。

〈28〉 同右。

〈29〉 同右。

〈30〉 陳埭鎮人民政府「陳埭回族社区二〇〇八年社会經濟情況統計」二〇〇九年二月。

〈31〉 丁信忠という人物が四〇〇ムー以上の海岸沿いの土地を下請けして農作物の栽培、牛・鶏・アヒル・魚の飼育をする「総合農場」を開設した。

〈32〉 陳埭鎮回族事務委員会「回漢團結拼搏、社区共同繁荣、再創新偉業、迎接新世紀」在陳埭鎮第五次回民代表會議上の報告、二〇〇一年四月二〇日。

〈33〉 陳埭鎮人民政府「陳埭回族社区二〇〇七年社会經濟情況統計」二〇〇八年一月。

〈34〉 陳埭鎮人民政府「二〇〇八年四川抗震救災愛心榜」に基づいて筆者が計算。

〈35〉 丁毓玲・丁惠蘭「民族政策暖人心、回民生活步步高」晋江市伊斯蘭教協會編『晋江穆斯林』（内部學習資料）第一〇期、一九九五年一月二〇日、一頁。

〈36〉 「陳埭回族歷史學術研討会召開」晋江縣陳埭伊斯蘭教協會小組編『陳埭穆斯林』第七号。

〈37〉 「陳埭鎮回族事務委員会工作彙報」二〇〇七年六月一九日。

- 〈38〉 丁毓玲・丁惠蘭「民族政策暖人心、回民生活步步高」晋江市伊斯蘭教協會編『晋江穆斯林』（内部学習資料）第一〇期、一九九五年一月二〇日、一頁。
- 〈39〉 以上は鎮党政弁公室職員である謝少梅が提供した数字であり、記して謝意を表す。
- 〈40〉 廈門大学『晋江県陳埭公社回族調査』。
- 〈41〉 王柯『中国における回族の宗族と海外移住——福建泉州丁氏と山東淄川蒲氏を手がかりに』（平成一七年度〜一九年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書、課題番号一七五一〇二〇四、一〇七頁）。
- 〈42〉 「晋邑」江頭丁氏豎棋柱表亭公派下家譜牒序（一）「至三世祖碩徳公、植業於城南、而四世祖仁庵公、始徙居住陳江」。
- 〈43〉 陳埭鎮回族事務委員会「晋江市陳埭鎮回族工作、重申陳埭鎮丁氏回族民族成份三十年周年（一九七九—二〇〇九）」六頁。
- 〈44〉 同右。
- 〈45〉 以上は現在の陳埭鎮回族事務委員会丁振沛主任の紹介による。丁振沛主任はかつて岸兜村の共産党書記と村民委員会主任（村長）を合計三回、約十年間務め、丁楷恩とさらに近い血縁関係をもっているが、良いチャンスを村民に譲れたと話している。
- 〈46〉 福建省晋江県革命委員会文件、晋革（七九）〇〇四号「關於重申陳埭公社七個大隊丁姓回族問題的批復」。
- 〈47〉 このことについては、定年退職後陳埭鎮回族事務委員会

副主任を務め、それまで陳埭公社衛生院の会計を務めていた丁桐志がはっきり覚えていたが、しかし理由については全く考えなかったという。

- 〈48〉 人民公社時代から陳埭公社工商管理所に勤め、後に「陳埭回族」の身分を回復し、そして第一回陳埭鎮回族事務委員会副主任を務めた丁国標の叙述に基づく。
- 〈49〉 「利用国家对少数民族的照顧和自力更生来搞活民族經濟」。陳埭鎮回族事務委員会編「陳埭鎮回族事務委員会二〇〇四年、ガリ版」。
- 〈50〉 以上の経緯は、基本的に二〇一〇年一月二二日と二三日の丁国標氏に対するインタビューに基づいて整理したものである。インタビューする場所はそれぞれ陳埭鎮回族事務委員会内にある晋江伊斯蘭教協會事務室内と泉州唯美口腔医院の事務室だった。当時その場には複数の丁氏の人々がいた。
- 〈51〉 「発刊詞」陳埭伊斯蘭教協會小組編『陳埭穆斯林』（ガリ版）第一号、一九八七年四月二五日。
- 〈52〉 「告読者」「真光永照、余熱長輝」『晋江穆斯林』（ガリ版）第八号、一九九三年六月一〇日。
- 〈53〉 「陳埭鎮回族事務委員会工作彙報」二〇〇七年六月一九日。
- 〈54〉 陳埭鎮回族事務委員会「陳埭清真寺歴史沿革」。
- 〈55〉 「陳埭清真寺管委會名簿」第一屆（一九九三年四月一日）。